

超近代へのパラダイムシフトと スマッツの「ホーリズム」概念

高橋史朗

1 文明の転換期

時代は今大きな歴史的転換期を迎えている。その規模は地球的、人類的、文明史的広がりを持っており、人間の営みのあるゆる領域で激しい変化と予兆が起きている。共産主義が崩壊し資本主義と経済至上主義の思想や体制にも大いなる変革が起きており、さまざまな矛盾や限界が見えてきた。

第一は自然的限界であり、自然の生態系（エコシステム）の攪乱や破壊、地球規模での人口増加である。第二は経済活動に内在する矛盾と限界である。わが国は今日、耐久消費材が消費者にゆきわたって飽和状態となり、生産能力はあってもそれ以上の成長は望めない。仕方なく輸出で稼ぎ、貿易黒字がたまってバブル経済となったが、それもまたはじめて後遺症が続いた。そして今IT革命と経済のグローバル化によって、国際金融における市場原理主義の弊害が指摘されている。

第三は「内なる自然破壊」すなわち人間性の解体化である。徹底した効率化や合理性にもとづく企業の論理が人間精神を蝕み、産業優先の社会構造が家庭や地域共同体を崩壊させ、経済至上主義と物質中心主義が人々の価値観を狂わせて、潤いのない人間と社会を創り出してきた。第四はこうした資本主義、経済至上主義と結びついてきた個人主義と自由主義思想の問題である。これが結果的に物と金という物質的価値観を至上のものとし、こうした欲望を飽くなく追求するという人間や企業や社会を生み出してきた。そして私と公、個と全体、ナショナルとインターナショナルのバランスと調和が失われ、人倫や道義、品性の喪失という事態を招来するに至ったといえる。

この共産主義の崩壊と資本主義の行き詰まりという時代状況は一体何を意味しているのだろうか。ここに時代認識の本質的な課題があるといっても決して過言ではない。共産主義も資本主義ともに十七世紀以降の西欧近代合理主義というパラダイム（ものの見方・考え方の基本的枠組み、ないし思考モデル）によって生み出された「双子の兄弟」であったといえる。両者ともに同一の病根のパラダイムに欠陥があるために破綻せざるをえなかったのである。

共産主義は「平等」を追求し、資本主義は「自由」を追求したが、両者ともその認識・思考方法に問題があった。では一体どこに問題があったのか。それは実在の論理ではなく思惟の論理を追求した点にあった。何故なら、自由と平等の実態はともに相補い合う関係であって切り離すことのできないものであり、これを分離してしまうと両方とも成り立たなくなってしまうからである。にもかかわらず両者を分離して考えてしまったのは、西欧

近代合理主義という思考モデルが根底にあったからである。この思考モデルについては後に詳述する⁽¹⁾。

2 教育のパラダイム転換

現代における人間性の解体化現象は、AはAであって非Aではない、という自同律、矛盾律を原理とする悟性 (ratio) のみに従って行動してきた近代の合理主義 (rationalism⁽²⁾) の必然的帰結として生じたものである。

それ故に、これを克服するためには、この近代のパラダイム⁽³⁾ を乗り越える新たなパラダイムに転換しなければならない。それはAは非Aによって存在し、非AはAによって存在するというように、本質的な相互補完関係 (<いのち>の全体的な「つながり」) において捉えられるホリスティック・パラダイムでなければならない。

古来、人間の持つ認識能力にはインテレクトス (intellectus) とラチオ (ratio) の二種類があるとされていたが、スコトゥス・エルウゲナがインテレクトスは高次の直観的認識、ラチオは低次の分析的・概念的認識を表わすものとして用いてからはこの区別が一般化して、トマス・アクイナスもこれを踏襲した。後に、感覚 (sensus) が個々の事物の雑多な形を雑多なままで捉える段階、インテレクトスがラチオによって区別されたAも非Aが本来一つのものであることを直観的に把握する段階に分けた。

近代になると、このインテレクトスのような高次の直観的認識は否定され、ラチオの概念的、分析的、比重的認識能力だけが承認されるようになり、ここに合理主義全盛の時代が到来するのである。概念的、分析的認識としてのラチオは、論理学のいわゆる自同律または矛盾律を原理とする認識であるといつてよい。

自同律 (Satz Identität) とは、AはAであるということであり、AはAであるから非Aではない。このAは非Aでないことを矛盾率 (Satz des Widerspruhs) という。従って、矛盾律は自同律が反省を経た必然的展開に他ならない。ラチオはこの原理に従い、AはAであると確定し、これを非Aから区別する。

近代になって信仰の力が衰えると、ラチオは自同律に即して、自己以外の何物にも従属すべきでない自律性を主張し、ラチオによって認識し得る世界のみを承認し、非合理的な量化し得ない世界の存在は承認しないという傲慢に陥った。ここにラチオのみに従って行動しようとする合理主義が成立するに至ったのである。

現代の危機や対立の根源にあるのは、この自同律、矛盾律を原理とする悟性のみに従って行動してきた近代合理主義である。これに対して、Aが存在するのは非Aが存在するからで、非Aが存在するのはAが存在するからである、というように相互依存関係において捉える原理を相互律という。

これがホロン概念であり、部分と全体、生と死、善と悪、有と無などの関係を単純な二分法論理に立脚した対立図式で捉えるのではなく、般若系の仏教思想の論理で表現すれば、「即非的自己同一」とでもいうべき共存関係として捉えるのである。

物理学者のカプラは、開かれた系 (つながり合ったシステム) としての生命体と、閉じられた系としての科学機器とは、その論理体系が異なると強調する。生命エネルギー研究

所の石川光男教授は、この生命体の論理を「生命思考」と名づけ、生命体が常に外界との交流の中で、個の調節をはかっていくその論理はパラダイムの転換なくしては困難だと指摘する。

その中心原理はホロン⁽⁴⁾の原理であり、ホロンとは、ギリシャ語のholos（全体）とon（部分の意の接尾語）の合成語で、全体—部分の共生・相互依存関係を意味する。つまり、全体としての物立性と部分としての従属性を併せ持つ実在の造語が、ホロンである。有機体がさまざまな器官系、器官、組織、分子、原子から成る階層構造を成しながら、それぞれの構成単位が特有の活動リズムとパターンをもって協働しているように、実在するものはみな、全体は部分に依存し、部分は全体に従って相互依存するシステム（ホロン）の中で、極大と極小に向かって、「両端の開いた壮大なホロンの多重の階層構造」を成しているのである。

3 機械論的世界観と要素還元主義

15世紀末に、コペルニクスの地動説が発表されたことにより、当時の価値観の絶対的な物差しである聖書の教えに合致する天動説は覆され、中世は終焉を迎え、新しい科学の時代が始まった。しかし、それは同時に、中世の人々のアイデンティティの危機という問題の始まりでもあった。

そして、17世紀、ガリレオ・ガリレイは実験科学という新しい科学の方法と、その実験結果の数学による記述を始めた。彼は科学に客観性を求めたため、数学的に客観性を持つ対象に限定し、数量化できない主體的な特性を除外した。ここに、客観性に偏った世界観の主客の分断が見られる。

また、帰納法をあみ出したフランシス・ベーコンは、旧来の中世思考を徹底的に攻撃し、自然を支配するための知識を科学から得ることを目的とした。ここに、人間との利害関係においてのみ自然を捉える、「自然支配」の一方に偏った今日の科学の性格が見られる。

こうして科学は、科学的手法が生み出されたことにより劇的に発展した。そのような中でルネ・デカルトは新しい科学におけるパラダイムを生み出した。それが自然を客観性のある数式で表すことのできる完全な機械とみなす「機械論的世界観」である。そして、この世界を具体化する方法が、複雑な対象を細かい構成要素に還元することによって全体を理解しようとする「要素還元主義」の方法である。これこそが、近代科学を支える原理と方法の支柱である。客観的な数値に置き換えられた各構成要素という部品は、機械の部品であり、その部分を組み立てれば完全に全体があらわれるのであり、それによってあらわせないものは非実在的なものと見なされた。

このデカルトの世界観の由来は、古代ギリシア以来の二元論にあり、そこから発した「要素還元主義」の手法により、世界を思惟するもの（精神）と延長されたもの（物質）に厳密に分離した。そして、疑わしいものを全て排除していった末に、最後に残ったものが「吾思う、ゆえに吾あり」の結論で、デカルトは物質よりも精神の方を確実なものとして重んじた。それがもとになり、精神以外のもの、すなわち物質、自然といったものへの機械論が生まれたのである。

しかし、デカルトは精神と物質を二分しながらも、全ては神の創造物であり、この二つは神によって結びついている相補的なもので両方必要なものだと考えた。この思惟するものを重視するデカルトの世界観も、近代科学が発展していく中で、次第に二つの領域の一方、物質の領域のみ重視するようになっていった。これは、中世の世界観への反発による極端な一方向性であった。

そして、このデカルトの機械論的世界観を実際にアイザック・ニュートンが証明し、ますます物質の領域重視が進んだ。ニュートン力学は、起きている現象とは無関係に永遠に不変の三次元空間である「絶対空間」と、同じように物質現象とは無関係で、過去から未来へと流れる「絶対空間」の中で働く万有引力の法則を発見した。これは、当時考えられる全ての運動体を説明することに成功した。

こうして、ニュートン物理学によって、全ては客観的・数学的に証明され、それ故に「普遍性」をもつ強力な知として近代科学のパラダイムは完成した。19世紀の終わりにはほとんどの全ての対象が説明可能となり、「世界は何からつくられ、どう働いているのか」という根源探しは終わりを告げたように見えた。世界は、堅固で不可能な原子によって構成され、ニュートンの運動法則によって動いている。宇宙は巨大な自動機械で、絶対時間の流れの中で永遠に変わらぬ運動を続けていく。

こうして大成功を納めた物理学のパラダイムは、あらゆる他の科学の基盤として「科学的」であるために模倣されていった。その中でも、特に人間存在を考察するのに重要だとと思われる意識世界、生命世界における機械論的・還元主義的パラダイムについて次に考察したい。

4 還元主義的心理学

まず初めに、意識世界について還元主義的心理学の展開からみていくこととする。基本的に科学は、客観的に捉えられないとする「心」「意識」「精神」「魂」「霊」といった問題を避けてきたので、心理学は「心」を科学的・客観的に位置づけようとしてきた。心理学者達は人間を「心」と「身体」にはっきりと分け（デカルトの心身二元論より）、前者のみを心理学の研究対象とし、後者を生理学や医学が研究するものとした。

そうして分離された「心」を機械論的モデルに還元する多くのアプローチが為されていた。その一つは、ジョン・ロックの、心は生まれた時は「タブラ・ラサ（白紙）」であり、感覚を通してそこに観念が刻み込まれるという論により、心は物質的な感覚という要素に還元されていた。

また、脳科学研究の発展により、精神活動が脳の特定部分に還元できるという見方が生まれた。さらに、神経系の研究の発展により、反射説が生まれ、あらゆる人間行動は刺激と反応の因果関係という基本的な反射機構の複雑な組み合わせであり、この組み合わせに全てが還元できるとされた。このような反射説の影響を大きく受けた行動主義心理学は、20世紀初頭から中期にかけて心理学の主流となった。行動主義心理学の創始者、ジョン・ワトソンは、客観性を求めるが故に、主観的な意識の問題を排除した心理学を行動の学問とした。そして、この心理学は生物を外部からの刺激に反応する機械と考え、全ての複雑

な反応もそうした単純な、刺激―反応の因果関係に還元されるとした。知覚のみならず、想像、思考、感情像にもこの考えを当てはめ、こうした複雑な現象も主体的な体験ではなく外部刺激への反応に伴った行動様式であると考え、それ故に、外部の心理的要因を制御することで、人間の心理や行動も制御できるとした。この考えは、自然だけでなく人間をも機械と見なし、利用する近代社会の在り方にはっきりと現れている。

行動主義心理学と並ぶ心理学二大学派である精神分析学は、創始者ジークムント・フロイトにより、心そのものの中に独自の機能を認め、無意識の存在とその力学を発見したという点で、行動主義とは一線を画するものである。しかし、やはり物理学に心理構造のモデルをおいたフロイト理論は、機械論的で厳密な決定論の見方をもち、あらゆる個人の心理的状态は、明確な幼児期の体験という原因を持ち、全てはそこに還元できるとした。

5 生命機械論と「科学の知」

次に生命世界における機械論的・還元主義的アプローチについて考察したい。

生命の正体については、「生きている」とはどういうことなのか、「死とは何か」など科学の発達した今日でも未だに謎のベールに包まれたままである。

生命観についても、二つの基本的な考え方が存在する。一つは、生命は物理・科学的には説明できず、生命を保たせたり、病や傷を回復させたりする秩序や生命の成り立ちは、特殊な何か―神、生命力、知られざるものなどさまざまに呼ばれる―が支配するという立場をとる「生氣論」で、17世紀に動物機械論がでてくるまではそれが主流となっていた。

もう一つは、生命は複雑かつ微妙であるが、本質的には無生物と何ら変わらないとする「機械論」である。これは、デカルトが動物機械論を説いたことから始まった。ただしデカルトは、自然法則のままにならない意志や精神を持つ人間だけは除外していたが、その像、ラ・メトリーの『人間機械論』により、機械論は人間にまで適用され、以降この生命観が生氣論に代わり一般的になっていった。

その後、19世紀に、物理的・化学的説明を認めた上でなお生物独自の原理を主張する「新生氣論」が出現し、未だ機械論と生氣論の対立は解決されていない。それにも関わらず、生氣論は棚上げされ、現代では機械論だけが一人歩きしている。

こうして今では、多くの人々の生命観が機械論的になっているが、それは、16世紀からの機械論的生命観をもつ現代医学の成功に大きく影響されている。また、20世紀になって遺伝子学が発展し、生命は遺伝子という設計図によって組み立てられている機械であるという考えがほぼ立証され、ますます「生命機械論」は進められていった。

こうしたあらゆる領域における科学の進歩は著しく、世界のあらゆるものの説明を鮮やかにし遂げていったので、そのパラダイムは科学の分野だけでなく、一般の人々の意識・考え方にまで浸透していった。人々は「科学信仰」を生み出すほど科学を絶対視し、その科学の成果として生産されたモノに対する「物質信仰」も登場した。「信仰」にまで発展した人々の科学への思い入れは、中世のパラダイムの崩壊により、自らのアイデンティティーを失っていた人々が、その不安から世界のこと、神のこと、人類の存在目的についての新しい定義を求めていることを背景とする。人々は世界の存在のリアリティーを発見しう

る新しい方法を科学に求めたのである。

ほとんどの物質世界のことを説明できた科学は、いずれは神、生命、人間存在の目的といった存在的、精神的な領域の本質まで発見できだろうと考えたが、その領域においては心理学、生物学の功績によりいろいろ答えが提出されもしたが、結局ははっきりとした「真理」としてすぐに与えられるものではなかった。従って、人々はその「真理」を得る間の不安を埋めるため、科学の成功領域における現世的な目的にとらわれていった。

その目的とは、答えを待っている間この世界でより快適に生きることであり、快適さの指標ともいえる物質的な豊かさを求めることであった。やがてそれ自体が目的となり、精神のリアリティーの探求を忘れ、「もっと、もっと」と物質的豊かさを限りなく追求することにより、とりつかれたように環境を破壊し、核の脅威を招き、人間性をも解体していったのである。

こうした現象を可能にした背景には、科学文明のパラダイムの確立に伴って西洋近代の自我が確立されていったことがある。西洋近代の自我は、自分を他と切り離した独立した存在として自覚し、他に対して自立的であろうとするところに特徴がある。このようにして確立された個人を、英語でindividualと表現する。つまり、これ以上は分割し得ざる存在ということであり、個人は他と切り離されることによって存在が明らかになるといえる。こうした自我によって、はじめて外界を自分と切り離して客観的に観察する近代科学を確立できたのであり、その切り離しによる外界の認識は、個々の人間とは関係ないものなので、その意味で「普遍性」を持ち強力な「科学の知」を人間に与える。

しかし、このような普遍性を持つ強力な「科学の知」が成立可能となるための背景に科学自身が排除したはずの基督教の世界観が存在している。河合隼雄氏によれば、科学の知が論理的整合性をもった唯一の統合されたシステムによって自然現象を（ひいては人間現象も）説明できるという、「真理・正しいものは一つ」という確信は基督教、すなわち一神教の世界観が支えているという。さらに、もとをただせば、近代科学の生みの親であるニュートンらは、彼らの自然に対する知識を、唯一の神の意志と知り、その栄光を讃えることを目的としていた。それらのことから、近代科学と基督教は対立するものというより、むしろ相補的なものであるといえる。

このような経過を経て、最初に人間と自然を分断し、次に人間自身さえも分断し、その分断したものを機械とみなすことにより、さらにも細かい構成要素へと還元していく近代科学のパラダイムは人々の心にあらゆる面からのアプローチを通して、深くしみ込んでいったのである。

しかし、前述したように、この近代科学のパラダイムによって作りだされた現代社会は、「外なる自然」「内なる自然」とも破壊され行き詰まり、それらが日常的に認識できる現象となって現れている。さらに、専門的な科学の分野においても、その限界が証明され、今まさに旧物理学が支える近代科学のパラダイムは、より包括的な新しいパラダイムへと変換され始めているのである。

6 新しい科学へのパラダイムシフト

20世紀になり科学の原型とされた物理学の世界で「機械論的世界観」と「要素還元主義」の限界が現れてきた。その近代科学のパラダイムに大きな打撃を与える理論が生まれたのは、アインシュタインの相対性理論に始まり、1920年代後半にいたって確立された「現代物理学」の動向からである。当時物理学の最先端にあった量子力学がニュートン・デカルトによって気づかれた近代合理主義のパラダイムに対してパラダイムシフトを迫ったのである。

アインシュタインは、物体と空間と時間はお互いに密接な関係をもっていて、それぞれが決して独立した存在ではないことを示した。ニュートン物理学ではそれらはおのおの独立した存在だと捉えていたから大変革である。つまり、空間はある物理的性質をもっていて、物体が存在するとその回りの空間はゆがむことになり、それはまさに相互依存の関係で決して分離することはできず、それ故に、自然現象を部分や要素に分解してみることに限界があるとされた。

物質はエネルギーの一形態にすぎず、素粒子は独立の堅固な物資ではない。物質が消滅して空間の中に存在するエネルギーに変われば、その空間はカラッポではなくエネルギーに満ち満ちた空間であり、ニュートンの「カラッポ容器」説はくつがえされた。量子力学のミクロの世界においては、光や電子はある時は「粒子⁽⁵⁾」のように振る舞い、ある時は「波」のように振る舞う二重性格（相補性）をもち、AはAであって非Aではないという論理はここでは通用しない。

それを観測する場合、観測者と観測対象とは相互依存の関係にあり、観測者が粒子として見ようと思えば粒子の性質になり、波として見ようとするれば波の性質をもち、それは同時に観測できない。物質の特性は観測者との相互作用によって決定し、見えてくるのは観測者の意識にかかっており、物資と精神を分離したり、客観的に自然描写するなどということは原理的に不可能だとされたのである。

機械論的世界観の前提となっていた物心二元論、やがて心を忘れて物を中心に描いてきた機械論的世界観、その世界は要素によって細かく分解することによって客観的に真実が発見されると考えてきた要素還元主義のいずれも再検討を要するものとなったのである。

まず、アインシュタインの相対性理論は、光量子の概念が示す、光の二重性（粒子と波という性質）の考えから、機械論的世界観⁽⁶⁾という思考モデルの根本的な修正を迫った。そして、相対性理論によるニュートンの絶対時間と絶対空間の破壊—すなわち時間も空間も相対的なものとした—は、自然を記述するこの基本概念を崩壊させ、近代科学のパラダイムを根底から覆した。

そして、ボーア、ハイゼンベルグらのいわゆるコペンハーゲン解釈が現代物理学の明確な表現を提出した。「コペンハーゲン解釈」は因果的な世界、客観的な世界を否定した。それと同時に、自然と不可分な関係にある変数としての観測者、つまり「思惟するもの」の重要性を強調し、主体と客体の不可分性を論じた。今まで見てきた近代科学発生の原点を見てわかるように、この客観性の否定、崩壊は近代科学の基盤を大きくゆるがすものとなった。

ハイゼンベルクの不確定性原理によれば、量子の世界では、時間を確定すると空間が確定できなくなり、逆に空間を確定すると時間が確定できなくなるという。つまり、運動量

と位置が同時に測定できないということは、「絶対性」を否定することになった。

さらに、ベルの定理によって、現象の原因が現象そのものの中にあるとする「非局所性」の考えが数学的に証明された。つまりそれは、世界の中でそれだけで存在している「部分」というものはあり得ないということであり、機械論的世界観だけでなく還元主義の手法をも否定した。

しかし、近代科学の機械論的世界観とこれに基づく要素還元主義は、私達の五感が感じる日常世界の次元ではもちろん現在でも適用可能である。しかし、一度量子というミクロの存在、根源的世界に入るとこのパラダイムは適用できない。つまり、このパラダイムには適用できる領域と、その枠組みを超えた適用できない領域があり、それを認識することが大事なのである。物質世界においても、意識世界、生命世界においても近代パラダイムでは適用出来ない領域が存在し、それに対してそのパラダイムを無理矢理適用しようとするにより、現代の問題は起きているといえる。そもそも、「分断」不可能な領域に踏み込んでその原理により分断してしまったことに現代の根源的な問題があるのである。

こうして物理学に始まったパラダイムシフトの波は生物学へと、さらには心理学へと波及していった。さらにこのパラダイムシフトは、これらの学問領域を超えて、中世から近代への転換に匹敵するきわめておおきなポスト近代への指向をみせているのである。

物理学者で新しい文明論の提唱者でもあるフリッツォフ・カブラは次のように指摘している。

「日本は西洋の科学技術を重視する近代産業社会だから、他のすべての産業社会同様、古いパラダイムの限界にも苦悩する。が一方、日本はまだ自国の伝統的文化との接点を残している。その文化の世界観には、いま具体的に形をなしつつある新しい世界観と、多くの点で共通するものがある。それゆえ日本は、今日の地球規模の問題解決のために早急に必要とされるホリスティックでエコロジカルな世界観への移行、それを促進する特別な立場に置かれた国であると、わたしは思っている。

これは、人種、文化、階級などすべての差を超越する活動である。地球はわれわれの共通の故郷であり、われわれの子供たちと未来の世代のために持続可能な世界をつくることは、われわれの共通の責務である。」

また、彼は物理学のパラダイムシフトに端を発した根源的、人類的な大きな革命の潮流を次のように概観している。

「物理学の新しい概念は、我々物理学者の世界観に、デカルトやニュートンの機械論的概念から、ホリスティック（全包括的）でエコロジカル（生態学的⁽⁷⁾）な視点へと、大きな変化をもたらしてきた。わたしの見るところ、それらは神秘主義の視点ときわめて似通った視点である⁽⁸⁾。」

ここで、示されているような「ホリスティック」な世界観とはつながりを重視するものであり、その意味で旧物理学の「分断」を乗り越える視点を提供している。また、カブラが示しているように、新しい現代物理学の世界観とホリスティックな世界観のもつ視点はきわめて似通っており、その意味で、これらの「対話」—比較、検証、相互作用—を試みることにより、分断の原理から引き起こされている現代の問題を解く鍵を手に入れようとすることは、きわめて意義深いことといえる。

7 ホリスティックな世界観—スマッツの「ホーリズム」概念

今日の人類的危機を乗り越える鍵になりうる「ホリスティック」な世界観とは、一体どのような世界観なのであろうか。次に、J. C. スマッツの『ホーリズムと進化』に見られる理論に基づいて考察したい。

「ホリスティック」という言葉は「ホーリズム」の形容詞形で、的確な訳語がないため、そのまま「ホリスティック」という言葉が使われているが、その意味する内容は決して新しく輸入された考えではなく、もともと東洋に根づいていた、包括的な考え方に近いものといえる。『中庸』の「天地の化育に賛ずる」という思想、鈴木大拙の「即非の論理」、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」という思想⁽⁹⁾、『モラロジー概説』において、「天功を助く」と説いた広池千九郎の道德科学にも共通するものがあるといえる。

鈴木大拙のいう「即非の論理」は、「金剛經」の「仏説般若波羅蜜多、即非般若波羅蜜多、是名般若波羅蜜多」の一句に凝縮されている。A即非Aは名A、すなわちAは非Aである。故にそれはAである、というのが「即非の論理」である。つまり、肯定（即）と否定（非）とが、そのまま自己同一だということである。西田幾多郎はこれを「絶対矛盾的自己同一」と表現したが、Aと非Aという絶対に矛盾するものの自己同一を示すのに、「即」という文字を用いた感性には驚嘆せずにはおれない。

自同律、矛盾律で他を排除し、他と対立するのではなく、いかにAと非Aが調和共存していくかこそが求められている。これからの教育が求めているのは、まさにこの新しい思考の枠組み（パラダイム）なのである。Aが非Aを敵視するのではなく、Aが非Aによって、非AがAによって存在しているという根源的な関係に深く「気づく」ことが大切なのである。

人類の将来は、私達がこの真実の関係にどれだけ気づくかにかかっているといっても決して過言ではない。現代人に感動の共感や生命の躍動感が枯渇しているのは、私達を「生かしている」この真実の関係性を見失っているからに他ならない。最も相性の悪い人こそ、自分に最も必要な、自分を成長させてくれるかけがえのない存在なのだということに気づくことが大切なのである。こういう新しいパラダイムに立脚することによってはじめて、私達はこれまでの教育界の不毛な対立を打ち破ることができるのである。

ホーリズム (holism) の提唱者である J. C. スマッツのいう「ホーリズム」は、植物の種子は単なるアトムではなく、それ自体の中に小さな宇宙を含む全体であるという概念で、生命体は各部分はその部分の中に全体意志が貫かれており、全体は部分の総和よりも存在価値があるとみる。

スマッツのいう「全体」という語は、日常的な使用においては、気づかれていない、豊かな意味を含むものであり、同書で述べられている「数々の全体」という概念は、宇宙の性格を基礎づけるものであり、「ホーリズム」というのは諸全体を創出していく進化のうちに働く動因であり、宇宙の根本原理の謂いである。

スマッツによれば、活動的創造的過程としてのホーリズムは、より多くのより深い全体性に向かう宇宙の運動を意味する。新しいものは古いものの創造的持続であり、古いものの否定あるいは古いものへの後戻りではない。有機的、精神的全体における本質的にホリ

スティックな要素を無視する機械論的な考えも、そのような全体における生命的、精神的や要素を誤解している生氣論的な考えも間違いである。両者の根本的な間違いは、全体における本質的な要素を切断し、それらの実在を独立に相互作用する実在または実体に切断してしまうことである。こうして体と心は、独立に相互作用する二つの実体であると誤って考えられるようになった。

心は原子と細胞の後に現われた、ホーリズムにおける第三の深遠な基本構造である。心はそれ自身真の全体ではないが、特に真の全体である人格のホリスティックな構造であり器官である。

心理学は、人間と高等動物における心を、ただそれだけを切り離して要因あるいは現象として扱い、心を意識、注意力、概念作用、感覚、感情、意志などのような活動の諸様態に分析している。心は、ホーリズムの一つの形態であり、他の初期のホリスティックな構造と一定の関係をもったホリスティックな構造として研究される。それ故、心は心理学によって明らかにされるよりもはるかに広い背景をもち、宇宙の秩序において、より根本的な働きを演じている⁽¹³⁾。

心は究極的には、無機物の親和力と有機体の選択性にまで遡ることができる。不均衡状態にある肉体の「緊張」は除々に、漠然とした「不快感」に覆われるようになり、その不快感が生き残るに値するものとなった。受動的な状態のままでいる代わりに、心は緊張状態または注意として活動的となり、究極的には意識となった。同時に心の活発で個別的な側面は、意欲、探求心、試みとして発達した。そして、この二重の基礎から、心は人類の初期の種において驚異的な早さで成長した。

自己を意識する個人の意欲的な心は、経験主体、自我、そして究極的には人格として、心理学によって当然重視されている。秩序の一般的体系において、個人はかき乱す勢力として、秩序に対する反逆者として現れる。しかし、反逆者は自ら勝利に向かって進路を切り開いて進むのであり、受難性と自由を手に入れ、前段階のホーリズムに見られる日常的な仕事から解放される。かくして、心は経験と知識の力を通して、生命の中の心そのものの状態を支配し、自由を確保し、心が辿り着いた統制的なシステムを支配するようになる。自由、柔軟性、創造性は、心の新しい秩序の基調となる⁽¹⁴⁾。

スマッツによれば、人格は、ホリスティックな連続的進化の中で最後に現れた最高の全体である。それは物質、生命、そして心という先立って現れた構造の上に建てられた新しい構造である。人格は宇宙の他のものといかなる起源上の関係ももたず、独特の、孤立した現象であるとみなされる傾向があった。しかし、人格の進化の連続の中の一つであり、宇宙における壮大なホリスティックな運動の最高段階なのである。

心は、人格の最も重要で顕著な構成要素である。しかし肉体もまた非常に重要であり、人格に人間性の豊かな香りを添えるものである。肉体を魂、あるいは精神にふさわしくないものとして、卑下する考えは、不自然なものであって、病的な宗教的感情にその起源をもっている。科学は肉体を救い出し、そのことによって人間を大いに幸福にした。理想的な人格というのは、心が肉体を輝かし、肉体が心を養い、そして両者が互いを変貌させるという点において一体である場合においてのみ生まれるのである。

肉体と心の関係についての難しい問いは、人格に関連して生じる。この困難の原因は肉

体と心という要素を分離し、それらの本質を独立した実在であるとみなすところにある。肉体と心は独立した実在ではない。一方は他方との関わりにおいて初めて意味と働きをもつものであるから、肉体のない心、心のない肉体というのは、両方とも意味のない概念である。心は肉体に作用するというよりも、肉体を通して、また肉体の中で働いているのであるから、肉体と心の関係を「相互作用」の一つとみなす通俗的な考えは正しいとはいえない。心の肉体に対する関係を記述するにあたって、「浸透作用」または、「内的作用」の方が「相互作用」よりは望ましい、とスマッツは指摘する⁽¹⁵⁾。

人格は本質的に自由と一致している。純粋というのは、人格と調和しない要素を取り除くことを意味している。それは人間性の次元の高い要素や次元の低い要素を調和的に調整し、次元の低いものを、次元の高いものに昇華させ、次元の低いものを通して、次元の高いものを豊かにすることを意味する。このことから、道徳的な鍛錬が人格の陶冶において必要欠くべからざるものとなることが理解される。人格は精神の教師であり、その教師の目的は自由であり、人格における粗野な点を精錬し、純化し、成長しつつある人格全体の中で、粗野なものを従わせ、調和させることによる内的生命の調和である。もしこの目的が人格によって達成されるなら、他のすべてのものが、それに付け加えられるであろう。すなわち、平和、喜び、至福、至善、そして人生におけるすべての崇高で価値あるものがそれである。かくして、自由で調和のとれた自己実現としての全体は、ホーリズムの最高善を要約したものとなるのである⁽¹⁶⁾。

スマッツはこのように述べて『ホーリズムと進化』を次のようにしめくくっている。

「我々の改善に向けての努力の背後に、究極的には全体の重みと推進力と宇宙の最も深い本質と傾向がある。ホーリズムと呼ばれてきたものが、人間の争いや混乱の中でも働いているということ、現象的には反対に見えても、最後の勝利は静かに確実に待機していること、そして、計り知れない犠牲は、虚しいものではなかったということに対する信念が私の中で強められてきた。宇宙のうめきと労苦は決して目的のないものではなく、無駄なものでもない。その深遠な労苦は、新しい創造を意味し、ゆっくりとした痛みを伴う全体の誕生、新しいより高度な全体の誕生、あらゆる宇宙の全体がそのさまざまな段階でぼんやりと憧れ、それに向かって努力する善の遅くても着実な実現を意味している。ゆっくりと着実に進歩し続け、全体性、完成、至福を達成するために努力することは宇宙の本質である。宇宙の他の段階に関して、人間にとっての本当の敗北は、努力するのをやめて痛みを和らげ、善に向かつての努力をやめることである。宇宙の深みから新鮮な泉のように湧き上がるホリスティックな努力は、われわれには失敗はないということ、すなわち安寧と真理と美と善の理想が確固として事の本質の中に基礎づけられており、その結果危機に晒されたり、失われることがないということを保障している。全体性、癒し、神聖さ一経験と同じように言葉の根源から生じるあらゆる表現と考え一は、宇宙のごつごつした上り坂の上にあつて、その達成を確信している。—それは、部分的には今ここにあり、最終的にはもっと完全で真実である。大きな全体における諸々の全体の上昇と自己完成はゆっくりとしているが、ホリスティックな宇宙の間違ひのない過程であり、到達点である⁽¹⁷⁾。」

8 新しいパラダイムと「共創」社会の形成

各地域の気候、風土、歴史や文化をベースに、まず基本にパラダイムがあり、ここから思想が生まれ、この思想から政策が導かれ、政策が制度となり、制度が定着して文化を生み、文化が時間的、空間的に拡大発展して文明が形成される。パラダイムの内容は大別すると、①世界観、②認識思考法、③価値観となるが、時代が求めている新たなパラダイムは以下のようなものである。

第一は生命的世界観である。自然を一つの生命ある有機システムと捉え、地球全体はこの巨大な生命体であるとみる世界観である。熱力学の第二法則にエントロピーの法則⁽¹⁸⁾があり、宇宙全体が無秩序の方向に絶え間なく変化していくという規則性があるというのが、この法則は孤立系、すなわち物質もエネルギーも外部とは出し入れしない体系でのみ成長する理論だったのである。ところが生物は、常に外部の環境と物質やエネルギーや情報を出し入れする開放系であるから、閉鎖系、孤立系の物理学的な法則には従わないのである。人間は絶えず外から植物を取り入れ、それを体内で消化してエネルギーとし、古くなった細胞を壊して新しい細胞をつくり、再組織化、構造化する。不要なもの（増大したエントロピー）は排泄物として外に出し（散逸させる）、動的に生命の秩序を維持（ホメオスタシス⁽¹⁹⁾）、形成する。このように常にエントロピーの減少をはかる現象を「散逸構造⁽²⁰⁾」と呼ぶ。

第二は個と全体の調和した、ホロニックで有機的、生態学的な国家・社会観である。それは自然環境と社会、文化と人間が一体となった共同体であり、お互いが補完し合い連帯し合うことによって築かれる国家・社会観である。

第三は物心一如の立場に立って、精神と身体と環境を一体として統合的に捉え、人間は理性と感性をもつ統合的存在であり、「共創⁽²¹⁾」的主体としてホロニックに捉える人間観である。第四は唯物史観や一元的な進歩史観ではなく、自然の秩序形成機能とさまざまな人間の営みによる、複合的、重層的、循環的な生態学的な歴史観である。

明治維新までの日本は、儒教、道教、仏教などの東アジアの文化を呼吸し、それらを日本人の感性で熟成させて日本文化を形成してきた。さらに明治維新以降は、西洋文明を吸収して急速に近代化を成し遂げた。いずれにしても、これまでの日本の歴史は、外国の文化を手本として受容し、それを変容させるという形で文化を発達させてきた。

明治維新以来、日本は西洋文明を手本として急速に近代化を進めてきた。しかし、長い歴史をもつ日本文化の伝統と、西洋社会の伝統との間には、ものの見方に本質的な差異があることを見落とし、西洋文明の絶対的普遍性を軽率に信じてきたことが大きな落とし穴となっている。日本と西洋の文化を支える世界観の差異を明らかにすることによって盲目的な西洋文明追従の呪縛から脱却し、日本人が進むべき方向性を明確にする必要がある。

グローバリゼーションの進む21世紀においては、国家としてのアイデンティティを明確にしなければ、国際社会において高い評価を受けることはできない。従って、21世紀以後の日本人に求められるのは、いたずらに外国文化の後を追うのではなく、日本の歴史を支えてきた文化の伝統を再評価し、その長所を生かした新しい文化を創造し、それを土台として国際社会に貢献するという姿勢である。それは、これまでの歴史とは異なって、

手本のない文化の創造に挑戦することを意味する。

20世紀は日本人が手本としてきた西洋文明が、文明の基礎となる世界観の軌道修正を始めた時期であり、期せずして、日本文化を支えてきた世界観に近づき始めた歴史的転換期となっている。このような時代背景を視野に入れるならば、西洋的な近代社会の枠組みから脱皮した新しい社会と文化の創造に挑戦する必要がある。

日本人の特質に合った新しい社会秩序と文化の創造を実現することが21世紀の日本人に課せられた使命である。個人重視と競争原理を土台とする西欧的な社会秩序に対して、陰陽補完による秩序の形成を重視する日本文化の伝統を活かした「共創」社会の形成は、日本人の精神文化の再構築のためにも有効である。「共創」を支える「自他補完」の原理は日本人の生き方の規範として役立つばかりでなく、西洋文明の欠点を補う役割としての日本のアイデンティティを明確にする上でも有効な指標となる。「共創」社会の形成のためには、個人重視の西洋的な主体性とは異なった主体性が求められる。幅広い視野に立って自己をコントロールする「包括的主体性」を発揮することが、西洋とは異なる自律型社会を形成する鍵となる。

注

- (1) 財団創立30周年記念出版編集委員会編『21世紀の改革者』(財) 富士社会教育センター、2000年、参照。
- (2) ベーコン、デカルト、ニュートンなどに始まる17世紀以降の西欧近代の合理主義思想。自然支配思想、物心二元論、機械論的世界観、要素還元主義などが特徴。この思想のもとに科学や技術が飛躍的に発展し、産業革命にもとづく産業社会の現出と今日の物質文明がもたらされた。その傾向は機械論的な物質主義にあり、今、この思想の功罪が問われている。
- (3) パラダイムとは、科学史家トーマス・クーンが提唱した言葉。語源はギリシア語のパターンを意味する「パラディグマ」に由来する。クーンはこれを特定の科学の基礎となっている支配的な理論的枠組みという。その後この用語は、他の広い分野にまで用いられ、知覚、認識、思考の際の基本的な枠組み、モデルという意味に用いられている。
- (4) ホロンとは、1968年、アーサー・ケストラーが『ホロン革命』の中で提唱した概念。ホロン(holon)とは、ギリシア語のholos(全体)に添字onを付けたもので、「全体」と「部分」の両義性をもつという合成語
- (5) 物質の基本的構成要素として、堅固で静止した分割不可能な不変の存在をニュートンは考えた。しかし、今日では粒子は堅固な粒ではなく空間的広がりであり、静止したものではなく波の側面をもつダイナミックな運動であり、不変ではなくエネルギーの一形態と理解されている。
- (6) 二分法思考に始まる機械論的モデルをこの世に存在するすべてのものに適用していった。人間の身体も機械のようなものだと考え、西洋医学では解剖医学が発達した。その延長上に、機械の部品を取り替えるように、五臓六腑を取り替える臓器移植とそのための脳死の問題が出てくる。このようにして機械論的なものの考え方が人間生活のさまざまな面に影響しているといえる。

- (7) 東洋では実在する世界と歴史は、常に均衡と調和を求めるプロセスとして捉える。象徴的にいえば、陰と陽の二つの対極的な概念があり、あらゆる自然現象は、この二つの極の間に周期的に揺れ動く連続的な変化の現れで、自然の秩序や歴史は、この陰と陽とのダイナミックなバランスとして捉えられる。この二つの極は決して異なった範疇に属するものではなく、一個の全体の両極にすぎないということである。
- (8) フリッチョフ・カブラ『新ターニング・ポイント』工作舎, 1995年, P. 12
- (9) 秋月龍珉『鈴木禅学と西田哲学』春秋社, 参照。
- (10) 同, P. 77
- (11) 拙稿「ホリスティック臨床教育学と鈴木大拙・西田幾多郎(1)」(『明星大学教育学研究紀要』第14号, 1999年, 所収) 参照。
- (12) Smuts, J. C., *Holism and Evolution*, The Gestalt Journal Press, Inc, 1996. P. 146
- (13) *ibid.*, P. 224
- (14) *ibid.*, P. 225
- (15) *ibid.*, P. 262
- (16) *ibid.*, P. 256
- (17) *ibid.*, P. 291
- (18) 無秩序の程度が大きい状態をエントロピーが大きいといい、時間とともにエントロピーが増大するものと考えられている。例えば、死んだ魚が腐るのは、生命体の規則正しい構造が分解して無秩序化する、というわけである。
- (19) 食べ物は違っても、人の血液の組織は常に一定に近く、ほとんど変化しない。このように、ある基準を常に保とうという生命の回復現象を「ホメオスタシス」という。生理的なレベルだけでなく、個体、さらには集団レベルの社会現象にもみられ、環境の変化を見越して予見的に働いたり、種の維持に働く大きなスケールのものもある。
- (20) モスクワ生まれのベルギーの科学者イリア・プリゴジン(1917～)によって提唱された理論。自然界には、外部からエネルギーを取り入れて、自己の中でエントロピーを生産し、それを外に排出することによってのみ形成されるある種の秩序、またそれ故の構造が存在する。そして、非平衡状態の中でのみ維持されるこのような構造を生命の本質であると考ええる。
- (21) 「共創」は「共生」を含む概念として用いられる。多様な存在が協調的な相互作用によって秩序を創る機能を重視している。従って、共創の概念は政治をはじめ産業経済システムにも適用できる。自然を支配する技術ではなく、自然の潜在的な自己組織化を活用する技術は「共創の技術」であり、企業が協力して地域社会や国際社会の秩序形成に寄与する経済システムは、「競争」経済から「共創」経済への転換となる。
- (22) 高橋史朗他『新しい日本の教育像』(財) 富士社会教育センター, 2001年, 参照。